

倉橋惣三先生の思い出



平井信義

倉橋先生の思い出は、昭和十四年に始まる。当時、岡部弥太郎先生の幼児教育学の演習に出ている私は、岡部先生に引率されて、女高師の附属幼稚園を見学に行ったのである。十人前後の学生は、岡部先生のあとについて、主事室にそろそろと入り込んだ。

その時の倉橋先生は、眼鏡の奥に細めた目をのぞかせ、微笑をたたえたが、開口一番、

「君たちは大学で教育学とか心理学を学んでいるが、今日は、それらを全部捨てて子どもたちを見なければいかんぞ！」

と言われたのである。それにつけ加えて、現在の学問のあり方を非難されたの思い出す。内容がどのようなものであったかは忘れたが、先生の開口一番が私にはこたえた。それは、興味をもって大で学んでいることに対して、かなり強い語調で否定された」とい

う印象をもったからである。その雰囲気におされて、その後の見学をどのようにしたか、余り記憶がない。遊戯室で子どもたちが輪になっていた。保育室からでてきた子どもが、われわれを先導する倉橋先生の手にすがりついたりした。その他の光景は、浮かんでこない。それよりもむしろ、何となく気重い感じがして、校門を出たという印象が強い。仲間の誰かが、「面白くなかったな」といった。私もそれに近い気持ちであった。

しかし、その後直接に子どもと接する機会が多くなるにつれて、倉橋先生のお言葉がひしひしと思ひ返されるようになった。そして、私自身も同じ思いにとらわれ、「子どもは未知な存在として、無限の可能性を持っている」などのことを言うようになっていた。すなわち、これまでの子どもについての研究が、本当に子どもの心

身の理解に役立っているだろうか——と反省することが多くなるにつれて、倉橋先生のお言葉が脳裡に深く刻まれるようになった。

女高師が新制大学に代わる時に、倉橋先生は児童学部構想を立てられた。それを拝見したことがある。それは実現されなかったが、それにも増して私の心を捉えたのは、児童学科のカリキュラムについて、入学した一年目を全部、実習に当てられようとしたことである。捉われない目を開き、心を聞いて、子どもを素直に受け容れることから、学生たちが新しい児童学を発展させることに希望を持っておられたのである。このことは、終戦後になって、たびたびお宅にお邪魔するようになってから、はっきり確かめたところであった。「学校で学んだことと、本当の子どもとは、かなりの隔たりがあるものですな」と、先生の温顔はほころびかけるのであった。

私が、中野の先生のお宅を訪れるようになったのは、何がきっかけであつたらうか。実は、それをよくおぼえていない。「幼児の教育」に原稿を書くように言われた頃でなかったかと思う。それは、突然の電話であつた。「倉橋先生からお電話よ」という妻の声に、びっくりしたのをおぼえている。昭和十五年の最初のめぐり合い以来、先生のお声に親しく接していなかった。当時の先生は、保育界の長老として第一人者であつたから私はおそるおそる受話器を耳にした。そこに流れる先生のお声は、極めて丁寧な原稿依頼であり、「あなたの好きなように書いて下さって結構です」ということであ

つた。私は「よし、自分の気持ちの向くままに書いてみよう」という気持ちになつたのを覚えている。そして、「先生のお気持ちにこたえるものにした」と決意した。

その後、先生のお宅を訪問するようになったから、あるいは原稿の連載について具体的な打ち合わせに伺つたのかも知れない。このように印象がおぼろであるのは、打ち合わせをしつかりしなかつたからでもある。「十回でも二十回でも、平井さんのいいように書いて下さい」と言われたのが、その時であつたかどうか。お宅での先生のお話は、全く別の、そして初めはそれをどのように考えたらよいか、わからないようなことであつた。「地球に立っているということはどういうことなのでしょうね。地球を両手で支えるといったことはできるでしょうかね」などと質問されて、私は戸惑いした。先生は、いつも微笑をたたえられ、目を細めて話されるので、本当の話なのか冗談なのかよくわからないことがあつた。先生には、私がお会ひした限りではそのようなことが多かつた。

玄関に入ると、奥さまがでてこられる。先客がある時には、下の部屋で待たされるが、そのまま階段をあがって二階の先生の部屋に案内されることが多かつた。四角い籐の机を中心に、同じ籐椅子が四つ向かい合っている部屋であつた。夏など風通しがよく、蟬の声が手に取るようにきこえてくることもあつた。二階への階段をあがってその部屋までいく間に、必ずといってよいくらい、先生は顔

を出された。二階の手すりから階段をのぼっていく私を見おろされ
たお顔を、今も思い出す。

先生を訪問した一回一回の記憶は少しもはっきりしていない。それは、先生を訪問する理由が少しもはっきりしたものでなかったことに一因がある。私にしてみれば、先生のお傍に坐っているだけで、そして温顔を接しているだけで、心暖まる思いがしたし、それを求めて先生のお宅へ出向いていったのかも知れない。また、当時、私は先生の著書を繰り返し繰り返し読んでいた。「幼稚園真諦」とか「育ての心」などである。それらの著書から学んだことと、先生のお宅で伺った話とが、どうも分離して思い出せないのである。

例えば、子どもたちが登園してきた時に、どのような挨拶をするかという問題に触れたことがある。その時、先生は、「ホクに挨拶する子どもはいろいろで、丁寧に『おはようございます』とお辞儀をしていく子どももあるし、飛んできて腕にぶらさがる子どももあるし、赤んべをしたり、お尻をつねっていく子どももある」と言われたように記憶するが、それを先生の著書の中で読み取ったような印象もあるのである。

いずれにしても、先生のお心には、どのような子どもをも認めようとなさる態度があつて、それに私が牽きつけられたといつてもよい。殊にその頃、形式ということにこだわり、その破壊によつても、真の心を聞くことを考えていた私にとっては、先生のお言葉は非常

に魅力的であつた。とにかく、まともではないが、そのお傍にいただけで、先生のお考えが伝わってくるような気持がしたし、そのような先生ではなかったかと思つている。偉大な先生の前にでると、とかくかしまつてしまふことの多い私にとって、倉橋先生の前では、一度もそのような経験がない。

先生は、その後間もなく耳を悪くされた。耳に水が溜るといふご病気で、外に出られることを極力制限されていた。「ばあさんの監督を受けているので……」とおっしゃつたこともあつたが、それに感謝しておられる口調でもあつたし、先生ご自身も病気を気にしておられる様子でもあつた。伺うたびに病状について話をされ、何かいい方法はないでしょうかなどきかれたりしたが、もちろん私の専門外でもあつたし、きちつと主治医の方がついでおられました。その頃から、お疲れがでないようにと、訪問時間を短縮するように心掛けたが、先生は「まだいいでしょ」などと引きとめられたりした。見舞客も多いらしく、私が玄関に立っていると、保育界の有名人、秋田・山村先生ら数名が二階からどかどかと降りてこられるのにすれちがつたこともあつた。それを心配されてか、二階のもう一と間の方に奥様がお茶の用意をされながら、何かと声を掛けられることもあつた。

ある時、「家へきてくれませんか、急に相談したいことがあるの

で……」ということで、先生のお宅に伺ったことがある。それは、Tさんの恋愛についてであった。Tさんが、自分の教えている学校の学生と恋愛状態に入った。そのことについて、私もTさんから話をきいていたが、当時としては、教師と女子学生の恋愛ということになると、いろいろとうわさになったり、あるいはスキャンダルにされる恐れがあるように考えられた。倉橋先生は「T君からそのことをきいて、何とか首尾よく二人が結婚できるように事を運びたいのだが……」ということであった。

実は、先生からこの話が切り出された時、私は一瞬不安に襲われた。それは、先生がTさんの恋愛を、あるいは好ましくないとおっしゃるのではないかと思つたからである。先生ぐらいの年配の人は、終戦後七・八年を経たとは言え、学園内での師弟の恋愛などを許容する状態にはなっていないからである。しかし、先生は何のこだわりもなく、二人の恋愛をお認めになっているのに、私は驚きもし、また心の暖まる思いがした。先生のご心配は、「二人の關係が、学校内でのうわさになって、かき乱されることがないようにするには、どうしたらよいか」ということであった。私もその点での配慮をしなければならぬことを考えていたので、その学生が卒業するまでは波風が立たないように努力しましょう——とお答えもし、冗談に、「先生のお宅でも二人がゆっくり会うことができるようにしては——などと申し上げたりした。

「うん、それは名案ですね。そうしましょう」

と先生は、一も二もなく肯定され、何でも目を細め、微笑をたたえては口をとがらすようにされたのを、今もなお思い出す。今の言葉でいえば、デートの場所に、先生のお宅を提供していただいたということになる。

その後、先生のご病気はあまりはかばかしくなかった。ご長男もそのことでご心配になっていて、別の場所でお会いするたびに、ご病状について話し合ったが、私などの介入するところでなく、ただ案じているばかりであったし、時にはご郷里に帰られたという話をきいて、案外、ご長命かも知れないなどと思い、それを願つたりした。

こうして思い返してみれば、私が先生と接したのは非常に短い期間でもあり、先生の年譜からすれば、その晩年に当り、先生が第一線をしりぞかれての方が多かったと言える。しかし、私の心には、先生のお考えのいくつかが植えられていると思つている。何が——といつても、それが明確な形をとっていないのは、私の力が貧弱であるせいもあるが、先生の偉大さからくるものではないかと考えている。私のこれからの人生は、いよいよ晩年ということになるが、もう一度、先生のご著書を通じて先生の歩まれた道を、たどりながら、私の心の中の柱を、見直してみたいと思つている。